

1月19日木曜の夜9時50分頃、眠りかけていると、妻に起こされた、「お父さんが倒れていて動かない」。寢床のある座敷からトイレへの通路にある4段の階段に、逆さでうつ伏せになって、父は倒れていた。声をかけても反応はない。妻と一緒に抱き上げて、寢床に横たえた。抱き上げる時、大きく息する音がしたが、手の脈を診ると棒のようになって拍動していない。隣で安眠している母を起こし、救急車を呼んだ。

救急車が着くと、心肺蘇生措置が取られた。病院への搬送中も続けられたが、「フラット」という声が何度も繰り返された。

病院では何らかの措置が行われていたようだが、生き返ることはなく、生命維持装置のようなものを外してよいかの承諾を求められた。推定死亡時刻が夜9時で、長い間、脳に酸素が送られてなく、もし生き返ったとしても、大きな障害が残るとの説明を受けた。装置を外してもらい、父の死が確定した。倒れて、顔を打った跡はあるが、出血はほとんどない。死因を明確にするためにCT検査が行われた。それでも明確にならず、「致死性不整脈（推定）」となった。

父は朝、「眠れなかった」と通所リハビリを休んだが、日中、いつも通りに過ごし、3食ともよく食べていた。最近は頻尿・尿もれと入れ歯に悩まされ、歩きが時におぼつかないことはあったが、日常生活はほぼ介助を必要としなかった。

父の死が確定して、夜間診療の待合室にいと、磐田に住む長姉が来てくれた。その後しばらくして、刑事が2人来た。表面は礼儀正しいが、疑うことを仕事としている、そんな意味で刑事らしい。実況見分のために、刑

事の車で午前3時頃、自宅に戻った。妻は起きていて、立ち会ったが、母は実況見分の間近で襖1枚隔てて安眠していた。

その後、今度は自分の車で病院に戻った。病院からの遺体の搬送を最大限延ばして、6時としてもらった。自宅に搬送するので、母や子供たちの安眠を妨げないためだ。待合室で夜間診療に訪れている人たちの人間模様を傍観し、用意された部屋で少し仮眠した。

救急車に付き添って乗った時から、その後についての考えを決め始めていた。3年前に父は慢性硬膜下血腫で入院中、手術後に肺炎

となり、生死の境をさまよった。その事があった、私はその後について概ね考えをまとめていた。葬儀社をどこにするか。どんな葬儀を行うか。葬儀社の言いなりになり、また世間体や「常識」に流されたくない。と言って、いつの間にか亡くなっていたという様な形で葬りたくもなかった。父を知る人とのお別れの儀式として、「常識」的でありながら、簡素なもの考えた。通夜式と告別式と似たようなものをするのはやめ、通夜は家族でしめやかに行おう。葬儀の形は昔から今のものであったわけでない。時代を経て、現在の一般的な形となっている。信心とも関係がないし、葬儀の意義として必要であるものばかりでもない。戒名は要らない。位によって料金が違うとか。信仰どころか、寺組織が俗化した結果ではないか。

6時半頃、自宅に帰って来た。ちょうど、小1の息子が元気に出ていくところだった。見送って、棺を運び入れた。

翌日夕方、訃報を見た方が、予想外に多く弔問に来られた。その後、家族と桑名の次姉とで通夜式を行った。私が般若心経を唱え、皆でお焼香した。(2017年3月春分)

【雑想】急死から納骨まで(上)

斉観堂 鈴木斉観